



大きな柿の木の下の小さな文庫

～柿の木文庫～



志村さん(右から2番目)と鈴木さん(左から2番目)。ボランティアスタッフの森まり子さん(左端)と谷釜房子さん(右端)

パソコンや携帯電話の利用が低年齢化する中で、昔と比べ今の子どもはあまり本を読まなくなったと言われる。子どもの頃に本に親しむことは、情操を豊かにする、文章表現力が身につく、漢字を覚えるなど多くの効用をもつ。最近小学校では、「読書」が授業として組み込まれているという。自主的ではなく大人がその環境を作らなければならなくなった……時代は確かに変わった。

ところが町田のある地域では学校の授業や図書館以外でも、本に親しむたくさんの子どもたちの姿を見ることができ。大きな柿の木がある庭の奥の小さな文庫……柿の木文庫は四半世紀以上にわたり、地域の子どもたちに本やお話の楽しさを伝え続けている。

27年前、まちだ中央公民館が開催した「読み聞かせと語りのための講座」を受講した鈴木真佐世さんたちとともに、代表の志村妙子さんが自宅の一室で開いた柿の木文庫。今では独立した建物となり、地域の小学生や幼稚園児、乳幼児の親子が定期的に訪れる。文庫が行うのは本の貸し出しだけでなく、語り、絵本の読み聞かせ、パネルシアター、紙芝居、手遊び、わらべ歌など。これらを、訪れた子どもたちの年齢によって組み合わせる。言葉の意味が分からない小さい子ども、まずは音やリズムを楽しみ、徐々に話そのものを楽しめるようになるのだそう。小さい頃、寝る前に親に絵本を読んでもらった記憶がある人も多いことだろう。このような経験は、知らず知らずのうちに想像する力、文章を理解する力を身につけ、読書を楽しむことにつながっているのではないだろうか。



おはなし会の様子。

志村さんは言う。「ここに通っていた子は、その後中学に入り部活などで本を読むことから一時遠ざかったとしても、楽しさを覚えているからいずれまた本に戻ることが多い。続けてきた甲斐がありますね」。もちろんこれからも、より多くの子どもたちにここに来て本を好きになってもらうことが願い。しかし、最近では子どもたちだけで外に出かけることが難しい環境となり、通う子ども数も徐々に減っているという。このため逆に小学校や幼稚園、保育園、子どもセンターなどからの出張依頼が増え活動は忙しくなっているが、30〜80歳と幅広い年代の地域の大人たち約30名が、ボランティアとして加わりこれを支えている。今の子どもたちに本を読むことの大切さを「伝えなければ」という思いは皆、同じなのである。



設立当初500冊だった文庫の本の数は、寄贈等で童話、絵本を中心に現在は約2000冊。

柿の木文庫…大蔵町2147
問い合わせ先
0427343564(鈴木)